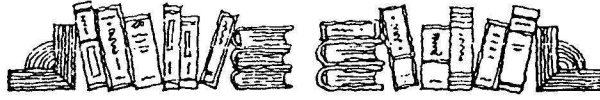


国語国文学会だより



No. 6

1991. 11

国文学科卒業生の会

国語国文学会 秋季大会・公開講演会のご案内

平成三年度の秋季大会・公開講演会を、左記のように開催いたします。ご多忙のことと存じますが、お誘い合わせのうえご出席下さいますよう、ご案内申し上げます。なお、会員以外の方々のご来場も歓迎いたします。

日時・平成三年十一月三十日(土) 午後一時三十分～五時
場所・本学八十年館 八五一教室

*開会の辞

*活動報告 午後一時三十分～一時四十分

*研究発表 午後一時四十分～二時四十分

(1) 「連歌至宝抄」について

本学国文学科助手 白石美鈴氏

(本学大学院修士課程)

(2) 動詞の自・他の対応と日中対照研究

——自動化——

国士館短期大学専任講師 中島悦子氏

(本学大学院博士課程後期)

*講演 午後二時五十分～五時

(1) 万葉の女性たち

本学国文学科教授

阿蘇瑞枝氏

(2) 私と古典

——『平家物語』を読む——

作家

永井路子氏

*閉会の辞

懇親会のご案内

秋季大会終了後、生協食堂に場所を移して、先生方、在学生をまじえての懇親会を開催いたします。

会員同志の交流、本学会へのご意見など、今後の会の飛躍発展につながるような交歓の場にしたと存じます。

尚、同封の葉書にて出欠をお知らせ下さい。会員皆様の、多数のご出席を心からお待ちいたして

おります。(来年度発行予定の名簿の資料にもさせていただきますので、必ず、ご返信下さい。)

時・午後五時十五分～六時三十分

場所・生協食堂

会費・卒業生 三千円

在学生 千五百円

(当日、大会受付にていただきます。)

永井 路子氏

東京女子大学国語専攻部卒業。

小学館勤務を経て、作家活動に入る。

昭和39年『炎環』で直木賞受賞。女流文学賞、菊池寛賞、吉川英治文学賞受賞。

『水輪』、『風と雲と』、『北条政子』

『美貌の女帝』、『茜さす』、『平家物語の女性たち』など著書多数。

卒業後、月刊雑誌「女学生の友」（小学館）編集部に飛び込み、編集者としてのスタートを切ったとき、黒板さん（ご本名）は編集部の大先輩でした。文章の旨さは当然のことながら、そのスピードとタイトルの見事さ、そして清々しい無駄のない仕事ぶり。

残業つづきの日々、でも何曜日も、黒板さんは手際よく仕事を片づけると、いつも紫色の風呂敷包みを手に、「それでは」とにこやかに退社されるのでした。その日が、吉川英治宅での勉強会の日であること、古文書をこつこつとお読みだ、と後に編集長に聞かされました。また、早くからモーツァルト協会の会員であり、「モーツァルトだったなら黒板さんに」というのがもつぱらでした。編集とい

う過酷な仕事の他に、大目的を持ち、休むことなくそれ続けておられる——仕事だけでなく、毎日が終わる新米の編集者にとって、まさに驚愕の先輩だったのです。

直木賞を受賞されて以来、古代から現代まで、幅広いスタンスで新鮮な人物像を華麗に描きつづけるご活躍ぶりの中に、資料を読みつづけられるご努力とその重み、モーツァルトの旋律のもつ美しさを、そしてあの編集部の日々の中で見せた、ジャーナリストとしての鋭い視点と感覚を、私は感じているのです。講演のお願いを、何も聞かずに引き受けくださった、後輩思いの方——です。

（新6回生 斉藤令子記）

阿蘇 瑞枝氏

鹿児島大学卒業後、東京大学大学院修了。

日本上代文学専攻。共立女子大学文学部教授を経て、現在日本女子大学教授。

主な著書・注釈書「柿本人麻呂論考」「萬葉集全注・巻第十」「日本の文学・

古典編——万葉集・二」「『万葉集』の世界」（中西進・梅原猛両氏との座談会を収録）。

人麻呂を探ることからはじまった先生の万葉集研究は、「万葉集」中の相聞歌、羈旅歌の変遷を追う和歌史の構築にまで発展され、その御仕事を、近々一冊の御本にまとめられるそうです。現在は枕詞・序詞など、「歌の技法」という新たな視点から「万葉集」をときほどうとしておられます。

先生の御研究に対するその情熱はもちろん、御趣味も学生顔まけです。五、六年前からコンピュータに凝っていらつしやるとのこと。論文や研究データを打ちこむばかりでなく、先生の御言葉を借りれば「無限の可能性を秘めていて、次に何が起きるか予想できない」コンピュータ操作にすっかり夢中の御様子です。

古代の人々の思いをしつとりと語られる一方で、現代最先端のハイテクノロジーにも興味をお持ちという、とても素敵な先生です。

（三年 萩原昌子記）

「自主ゼミ」活動紹介

平安文学談話会

平安文学に関する研究報告の後、自由に話し合いをするという形式の会を、年四回、開催しています。前回は、杉田まゆ子氏の発表。要旨をご紹介します。二回目は、安藤武子氏による「枕草子の服飾について」の予定です。さまざまな視点から平安文学へのアプローチがなされる談話会をめざしています。毎回、出席できない方でも、次回の日時、テーマを連絡先までお問い合わせの上、是非ご参加下さい。

連絡先 高野晴代

〇三—三三七〇—六八〇六

『公任集』の成立

杉田まゆ子

平安中期の歌人、藤原公任（966—1041）の私家集が『公任集』である。総歌数五六五首の多くが贈答歌で、家集前半は四季の部立を意識した構成、後半は雑纂形式となっている。また重出歌・削除歌の状態や巻末の勅撰集入集歌（家集未載歌）の増補等、後人の手が加えられている。

従来『公任集』の成立は「道信の中將、詠みたる歌ども書き集めたる、かたみに見せむと……」（42番歌詞書）と藤原道信（正暦五年没）との交換家集をもとに、長元年間頃、他者によって編纂された、又は詞書の官職名から寛仁元年頃までに公任自身が詠草の蒐集整理を行った、と考えられている。この交換家集を手掛りに、家集の成立を考察した。

成立年代の鍵は家集の詞書にあった。「扇をやり給ふとて」（370）「下鞍やるとて」（60）は、二度とも公任から実方へ物を贈る際の詞書である。このように公任の動作に、敬語を付す詞書の歌（敬語使用歌）と敬語を付さない敬語非使用歌が家集中に存在した。つまり、他者が家集に収載する折に詞書中の公任の動作に敬語を付した、と考えられよう。

敬語使用歌は四季の部の前後、題材の纏まりの前後、後半部分に多く見られる。また、家集の歌全体の詠作年次を検討した結果、敬語非使用歌八一首中、道信の没年・正暦五年までの詠作五十一首、長徳・寛弘年間十四首、不明十六首となり、多くが交換家集の枠内に入る。その上、正暦五年以前の詠作九十七首中、①道信との贈答歌②父の死による哀傷歌③詠作年次と文章化された年次が隔っている歌、を除くと敬語使用歌が見られなくなる。

このように現存家集の骨格に交換家集がなっており、敬語非使用歌が長徳・寛弘年間まで見られることから、寛弘年間まで公任は自撰家集を拡大していったと考えられる。こ

の時期は①公任の私撰集の編纂時期と重なる②公任周辺の人々が世を去り、家集を進呈・交換する相手を失った、の二点から、自撰本『公任集』成立の区切りの時期と言えよう。この後他者が敬語使用歌、勅撰集入集歌を加え、現在の『公任集』が成立したと考えられる。

— 以上が、発表要旨であるが、談話会で賜った御意見を参考に、時期の特定・編纂動機等、拙論を向上させていきたい。

- (1) 竹石美智子氏「公任集に関する一考察」
（『国文』23 昭40・7）
- (2) 竹鼻績氏「公任集考—成立の問題を中心として—」（『言語と文芸』69 昭45・3）

* * *

現在活動されている「自主ゼミ」の中から、今回は「平安文学談話会」にお願いして、研究活動の一端をご紹介します。順次、他の自主ゼミ（「国語国文学会だより」前号参照）の活動に就きましても、ご紹介していきたいと考えております。

新たに自主ゼミ設立をご希望の方は、

① 研究テーマ

② 責任者名（回生・住所・電話番号）

③ ゼミメンバー（会員三名以上）

を明記の上、「国文学科内 国語国文学会 卒業生の会・企画係」あて、はがきでお申し込み下さい。

設立の紹介は来春の総会で行います。

日本女子大学国語国文学会会計報告

平成2年度卒業生会員関係決算報告

平成3年度卒業生会員関係予算案

1991, 5, 2監査

1991, 5, 30

【収入の部】

前年度繰越し金	629,207
会費	549,500
寄付	100,000
利子	7,667
懇親会費	114,000
「国文目白」(平成元年度分)誌代・発送代	63,000

小計 1,463,374

【支出の部】

通信費	135,124
文具代	12,131
コピー代	2,120
会報印刷費	93,112
委員会会合費	2,829
ゼミ費	40,000
懇親会費用	89,790
「国文目白」誌代	129,828
発会準備費用立替分返済費	200,000

小計 704,934

繰越し金 758,440

上記の通り決算報告致します。

会計 スズキ 依子
倉田 宏子

監査の結果、上記決算報告が正確であることを認めます。

監査 荻窪 昭子

【収入の部】

前年度繰越し金	758,440
会費	500,000
懇親会費	100,000

小計 1,358,440

【支出の部】

通信費	200,000
文具代	20,000
コピー代	10,000
名簿整理費	20,000
会報印刷費	200,000
委員会会合費	15,000
ゼミ費	60,000
懇親会費用	100,000
発会準備費用立替分返済費	100,000
予備費	633,440

小計 1,358,440

伝言板

*会費納入のお願い

本年度の会費千円未納の方は、前回の「国語国文学会だより」に同封致しました払込用紙に、氏名・電話番号・回生を御記入の上、郵便局からお振込み下さい。

*『国文目白』第31号は、

「井上百合子 亀山健吉 両教授退任記念号」となります。

申込み先〒112 東京都文京区目白台二一八一

国文学科研究室『国文目白』係宛、はがきにてお申し込み下さい。

*当会の運営について

国語国文学会卒業生の会は、回生委員会、またその中の常任委員会、さらに学校側委員、学生委員とによる運営委員会の討議によって運営されています。ご希望、ご意見をお寄せ下さい。

一九九一年十一月一日

発行・日本女子大学国語国文学会

卒業生の会